

第2次大戦の日本の行動（その9） 大戦の指導者の考察

01602334 松山大学 湊 晋平 MINATO Shimpei

まえがき

第二次大戦の日本の指導者について、昭和天皇は明治の頃の指導者に比して劣っていたことを告白しておられる[1]。彼らを考察する場合、比較対象として相手側の連合国の指導者と対比するか、あるいは日露戦争の指導者と対比するのが適切であろう。この詳しい考察は別の機会に委ねることにして、この報文では主要な要人を取り上げ、その特質を考察する。

1. 東条英機

東条英機は首相としてまた陸相として第2次大戦を戦った。彼に関する人物論も色々ある。東条は頭もよく几帳面な小心者であったと言われている。岸信介の言に「東条という人は、事務処理についてはあっぱれなもの、資料の整理などは天下一品だった。それに陛下に対する忠誠ということは絶対だった。」と語っている[2]。

しかし彼のやり口を検討すれば陰険、悪辣な人間であり、しかも権力欲の権化だったと解されてもしかたのないものが多い。特に、意志に反するが正しい意見具申をするスタッフ認めず、これを左遷し、あるいは危地に送り込むという処置を取ったという。この結果スタッフは正しい情報や意見を具申するよりも、彼の気に入るような情報や意見や、処置をメーキングして報告する取り巻きばかりとなり（3奸4悪）、意思決定をますます誤ったものにした。彼の偏狭な性格が自己の失敗を認めず、また彼より優れた人に対する競争心が強く、多くの有能な人を無為に遇した。

昭和天皇のお言葉に「元来、東条という人物は、話せばよくわかる。それが専政家のように評判がたったのは、本人があまりに多くの職を掛持ち忙しすぎるために、本人の気持ちが下に伝わらなかったこととまた憲兵をあまりに使いすぎた。それにXとかYとか、とかく評判のよくない且、部下の押さえのきかないものを使ったことも評判を落とした原因であろうと思う」とある[3]。

彼がこうなったのは正直な小心者が、事態が自己の処断能力を上回り物事がうまくいかなかったときに色々

なストレスを受け恒常心を失った例の一つと考えられる。

東条は一国の政治指導者としての器ではなく、困難に処する賢明な方策を失い国を誤ったと考える。

2. 山本五十六

山本五十六はシナ事変、三国同盟、日米開戦には一貫して反対の意思をもっていた。しかし、一度開戦になれば真珠湾攻撃、マレー沖海戦の華々しい戦果を挙げてスタートし、国民の戦意昂揚に寄与した。また、多くの部下は彼の命令のもと欣然死地に赴いた。彼の南太平洋の戦死をきっかけに、日本の戦勢は悪化の方向をたどり遂に敗戦に至った。彼は悲劇の英雄といえる。

しかし、敗戦の原因を厳しく追求するとき彼の戦略的意思決定の責任は重大である。

1. 真珠湾攻撃の是非：真珠湾攻撃は国民に前途に希望を持って戦争に赴かせた。しかし米国民を「真珠湾の騙し打ち」のスローガンの基に団結させた。この意味で政策的には失敗といわれている[4]。戦略的に見ると、日本の東南アジア進攻を支援する効果はあったが、伝統的な対米作戦を破壊した。更に軍艦より航空機による戦争に変換を米国に認識させたことは、生産能力に劣る日本にとって致命的な失敗であった[5]。米国は少し時間は遅れたが伝統的なオレンジ作戦に沿って対日戦を戦った[6]。

2. 自己主張が強く独善的であった：彼は有能の余り軍令部と対立し、ミッドウェイの敗戦を招いた。常に連続的な積極的作戦によって消耗戦になり戦力を枯渇させた。

3. 合理的でなく直観的・非科学的である：彼の大局観は正しいが、博才に賭け合理的な戦法を選ばなかった。また、水から石油を造るエピソードのように非科学的なところがあつた。彼の自らのりだした戦闘指導をみると彼は能力はあるが戦運がなかったといえる。

このようなことから山本は前線で戦争を指揮するより早期に東京に帰り、海相もしくは首相として戦争終結の役割を務めることが望ましく必要であった。

3. 明治の指導者との対比

明治の指導者の特色は、正規の学校で学ぶより維新の戦乱の中をかいくぐり、実践を通じて体得した知恵に基づいて行動している。彼らは自ら環境を調査し、行動を計画し、実践せねばならず、このため部下も本当に実力あるものを選別し、任用した。諸外国の恐ろしさを知り、日本が生き残る道を真剣に苦慮模索した。

これに対し昭和の指導者は、制度的に整備された学校で知識を学び、日本の国際的地位も高く認められている国際関係の中では本当の日本の実力を認識してなかった。

それよりも自己の属する組織・派閥の中で、同僚との激しい競争の中をいかに立身出世するかに努力せねばならなかった。ここに組織の中で如何にうまく立ち回り、成果を示すかがエリートの行動基準となった。

参考文献

- 1] 文芸春秋, 1990 12月号, pp94~145, (1990)
- 2] 有竹修二, 「昭和の宰相」, 朝日新聞, p183, (1967)
- 3] 1] p123
- 4] 実松讓, 「情報戦争」, 図書出版会, (1972)
- 5] 黛治夫, 「海軍砲戦史談」, 原書房, (1972)
- 6] CWニミッツ, 「太平洋海戦史」, 恒文社, (1992)

明治（日露戦争）と昭和（第2次大戦、戦前・戦中）の指導者

	明治	昭和
元老	伊藤博文 山県有朋	西園寺公望 牧野伸顕 木戸幸一
首相	桂太郎	近衛文麿 東条英機
外相	小村寿太郎	松岡洋右 東郷繁徳
陸相	寺内正毅	東条英機 杉山 元 阿南惟幾
海相	山本権兵衛	及川古志郎 嶋田繁太郎 米内光政
参謀総長	山県有朋	杉山 元 梅津美治郎
野戦軍総司令官	大山 巖 児玉源太郎	寺内寿一
軍令部総長	伊東佑亨	永野修身 及川古志郎 豊田副武
G F 長官	東郷平八郎 島村速雄 加藤友三郎	山本五十六 古賀峯一 豊田副武 宇垣纏 福富繁